

教育現場におけるp4c活用の可能性を探る

庄子 修・堀越 清治

教育現場における p4c 活用の可能性を探る

庄子 修*・堀越清治*

Seeking the application of p4c in school environment

Osamu SHOJI, Seiji HORIKOSHI

要約 2013年に仙台で初めて実践されたp4c。最初に見た誰もが「何だろう?」と思ったに違いない。しかし、子どもたちの変容を目の当たりにし、多くの教員がその魅力と可能性に引き込まれ、実践の輪が広がってきた。円座になり毛糸のボールを使って対話をするp4c。そこには、安心して対話のできる集団づくり(セイフティ)とともに、探究心や思考力の向上につながる大切な要素が潜んでいたのである。本論は、子どもたちに考える力を付けさせたい、コミュニケーション能力を高めたいなど、熱き思いをもった教師たちの取組と、実践を通して次々と明らかになっていくp4cの有効性について述べたものである。



キーワード: 円座, コミュニティボール, 対話, 問い, セイフティ

1 はじめに

(1) 「p4cとは?」と聞かれて

philosophy for children。直訳すると「子どもの哲学」。アメリカで考案された、対話を用いた集団づくりの教育活動である。特にハワイでは、p4cに関心をもつ個々の学校教員が草の根的に対話を生かした教育を実践し始めたが、いくつかの学校では学校全体の教育理念にも大きな影響を与え、学校ぐるみでの教育活動へと発展している。ポイントは、①円座になり、毛糸のボールを使つての対話 ②「なぜ?」「本当なの?」など、「問い」の重視であり、「何を話しても笑われない、批判されない、否定されない」「みんなが、ちゃんと聞いてくれる」という安心感(セイフティ)が基盤にあることである。

「では具体的には?」と聞かれても、言葉で説明することは難しい。円座になった中でボールをやり取りしながら考えを深めていく子どもたちの様子を実際に見学してもらうか、教員同士でのミニ体験研修を通して実感してもらうのが一番の近道である。この中で、コミュニティボールの作り方や対話の進め方、セイフティを大切にするという理念についての理解が深められるのである。

(2) p4cに期待される教育的な効果は?

p4cの目的は何なのか。成果をあげ、その実践者が全米の優秀教員に3年連続で選ばれたハワイ。長年の課題は、人種差別や暴力への対応であったと聞く。文化や価値観の異なる人びとの相互理解を促すコミュニティづくりを目指していたハワイの学校にあっては、p4cの「セイフティ」の理念がその課題解決に大きな役割を果たしたということである。

* 宮城教育大学 教育復興支援センター 上廣倫理・哲学教育研究室 特任教授

翻って、現在の日本の教育では、「確かな学力」の中でも、「思考力、判断力、表現力等」の育成が課題となっている。p4c を見た何人かの校長からは、「問いを大切にすることから、思考力や探究心を養うために p4c を活用したい」という声や、「対話を重視する p4c で、コミュニケーション能力を高めたい」といった声が聞かれた。一方、「心の教育や集団づくりを目的として活用したい」という思いで p4c を活用した実践もあった。セーフティが確立された集団であれば、生徒指導上の問題が解決するだけでなく、学び合いが効果をあげ、確かな学力の向上にも直結するとの考えによるものである。

このように、p4c 活用の目的は、実践者・実践校によって異なる。むしろ、異なってよいというのが p4c の特徴かも知れない。目の前にいる子どもの実態に応じて p4c 活用の目的を実践者や実践校自身が明確にし、それを念頭に様々な場面で、様々な工夫を加えながら実践する。これは、マニュアルに沿った指導ではないだけに、教師の力量と創造力が問われることはもちろん、その効果については、無限の可能性を秘めているということにほかならない。

(3) 単なる教育手法なのか？

p4c には、「コミュニティボールを持った人だけが話せる」、「話したくなければパスをしても良い」「できるだけ発言していない人にボールを渡す」などといったルールがあるが、その裏側にはそれぞれに深い意味がある。ボールの渡し方ひとつをとってみても、セーフティを大切にする p4c の理念が息づいている。p4c を単なる教育手法の一つとしてとらえ、進め方を理解させ、ルールを守らせて終わるのではもったいない。それぞれの動きに込められた意義やルールの奥にある意味について、教師自身が理解を深め、子どもたちに浸透させていくことが大切であり、そこにこそ p4c の価値があるといっても過言ではない。

また、p4c には、これまでの教育では実現できなかった要素が含まれていることに注目する必要がある。振り返ってみると、教師は最後には「落としどころ」にまとめようとし、子どもは教師の反応や表情を見て「正解に近い発言」を探ろうとしてきたという反省はないだろうか。一つの正解を求めてきたこれまでの教育には限界があることを、私たち教育者はもちろん、社会の誰もが感じつつある。人間の生き方にはマニュアルなどない。特に「千年に一度」と言われる大震災を経験した被災地の人々にとってはなおさらである。次期学習指導要領の改訂に向けた動きは既に始まっているが、「新しい時代に必要となる資質・能力」を育むための学びとして、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」が提唱されており、まさに p4c の趣旨に合致するものと考えられる。

こうした中であって、p4c が「集団づくりのための単なる手立て」、「コミュニケーション能力向上のための単なる手立て」などといった単一の目的ではなく、複合的な効果を生み出す活動であることの意味を考えたい。子どもの実態や成長過程に応じて、その目的を随時高めていきながら継続して取り組むことが、その効果を倍増させる鍵となるであろう。「p4c を活用してこんな子どもたちに育てたい。それがある程度達成できたら、次の段階ではこんな成果を目指したい」といった教師の夢を実現させる方法として、活用が期待できるはずである。

2 実践の足跡

(1) 第1期（萌芽期：試行錯誤の実践を通して）2013 年7月 ～ 2014 年5月

① 概要

仙台で最初に p4c の実践が行われたのは、2013 年7月である。東日本大震災以来、様々な支援を受けつつハワイとの交流を進めてきた若林小学校。この年ハワイからの訪問を受けた際に6年生を対象として行われたのが、仙台における初めての実践であった。ここではボール作りと簡単な問いを出して話し合う授業が行われたが、参観したほとんどの先生方が、「これはいったい何だろう？」と、目を丸くした。

翌8月には、ハワイ大学で長年にわたって p4c の研究に携わり、当時兵庫県立大学に勤務していた共同研究者の豊田光世講師を招いて、仙台市立小中学校の校長ら10名が p4c についての研修を受けた。「セーフティが

確保されれば、すべての教育活動がうまくいく」という、ある校長の発言が印象的だった。

この研修会に参加した学校を中心に、その後翌年3月までの間に豊田講師を招き、仙台市内7つの小中学校で、延べ10コマの授業が行われた。そのうち小中各1校ずつの計2校が仙台市教育課題研究発表会において実践を発表した。ここには、ハワイ大学から、「p4c ハワイ」の育ての親であるトーマス・ジャクソン博士にも参加していただき、夜の懇親会を含めて多くのご指導をいただくことができた。また、ジャクソン博士には、仙台市内の児童館において、小学校低学年の異年齢集団を対象としたセッションにもファシリテーターとして参加していただき、p4cの真髄を披露していただいた。

2014年度になって、本学の教育復興支援センター内に公益財団法人上廣倫理財団のご寄附により「上廣倫理・哲学教育研究室」が設置され、専任の特任教授2名が配置されることとなった。この年度から東京工業大学に移られた豊田特任准教授をお招きし、これまで関わってきた学校を中心に、4月から6月までの間に、仙台市内6つの小中学校において、延べ11コマの授業実践が行われた。また、「p4c せんだい」と名付け、夜には実践者が集まってのカフェ（自由な雰囲気の中での意見交換）や、研修会も行われるようになった。

この時期は、ボール作りと、「問い」を出して話し合う授業実践が中心であり、p4cの有効性や可能性、進め方や授業に取り入れる際の疑問や課題などが明確になってきた。実践した教員や参観者から「よく分からないけれど、子どもの変容を見ると、直面する教育課題解決の糸口となり得る、多くの可能性を秘めた実践かも知れない」という声が多く聞かれた。その「多くの可能性」について、実践を通して明らかにしていくという展望が開けてきた時期でもあった。

② 特徴的な実践事例

ア 2014年3月。Y中学校の2年生を対象とした授業。何度かp4cを実践していたこの学級では今年度最後ということで、初めに「1年間の思い出」というテーマで全員にボールを回した。そして、ある男子生徒のところでボールが止まった。10秒が経ち、20秒が経ち……。思わず周りの生徒から小声で「パスしてもいいんだよ」との助け舟。それでも彼はボールを離そうとはしない。そして2分も経った頃、(実際にはもっと短かったかも知れない)ようやく自分の考えを口にした。普段の教科の授業場面であれば教師はその沈黙に耐え切れず、「思いついたら後で話してね」などとお茶を濁しながらその生徒を飛ばしていたに違いない。ボールを離さなかった生徒は、話したいという意味を明確に示していたのである。普段考える時間を待ってあげていない教師としての反省材料にもなった。

イ 2014年5月。M小学校4学年での授業。印象に残る場面が3つあった。様々な事情を抱えながら生活する児童が数多く在籍するこの学校では、自分を主張したい児童や自分を出せずにいる児童がいると聞いていたが、それは輪になって座る最初の場面から見て取れた。私語が多く、先生の話の聞けない。話したい気持ち動きになって表れ、最初の円は、いつしか楕円となっていた。しかし、それが授業の後半にはルールが守られるようになり、静かに話を聞くようになったのである。

また、1回目にボールが回ってきた時には話せなかった女兒が、2回目以降は積極的に話せるようになった。この女兒は、生育歴や家庭の事情から、これまで自分を出すことはあまりなかったということである。

もう一つ。授業の途中で入ってきた男児がいたが、ボールが回ってくると小声ではあったが自分の考えを話した。聞くと、不登校傾向にあり、久しぶりの登校であったそうである。「p4cが楽しかった。またやってみよう」と話していたことを後から知り、参観者である私たちが驚かされた。p4cは不登校対策にも有効かも知れないと感じる事例にもなった。

ウ 2014年5月。W小学校5学年での授業。みんなで考えてみたい問いについて話し合っていた際に、ある女兒が発した「人はなぜ死ぬのか」という言葉。それまで楽しそうに話し合っていた学級の空気が一瞬止まった。後で聞くと、その子の祖父が最近交通事故で亡くなったという。交通指導隊の一員として毎朝登校する子どもた

ちの登校指導にあたっていたその祖父を、知らない仲間はいなかった。そして亡くなったということも。しかし、これまで誰もその話題に触れることはできなかったという。その事故以来初めての女兒からの言葉に、全員が息を呑み、その言葉の重さを深く噛みしめたに違いない。外部からの参観者には到底分からない奥の深い話である。こうした事例はその後の実践でも多くあった。被災体験や発達障害の兄弟を抱えての苦悩、親の離婚問題など、発言の背景に子どもが抱えている様々な家庭環境や状況は、担任にしか分からないというケースも多い。子どもの動きや言葉に秘められている深さは、その子の特徴と照らし合わせて読み解く必要があるということを痛感した。

③ 実践者や参観者からの感想・疑問

ア 今まで知らなかった子どもの一面が見えたとし、学級内の人間関係もつかめた。

イ 発達障害の子も参加できたとし、受容する学級集団の質の高まりも見えた。

ウ 様々な問いが出されるようになり、「考えるのが楽しい」と感じる子が増えた。

エ パスをせず、じっと考えている子どもを教師が待つという場面は、貴重である。

オ 私語だらけだった集団が最後には静かに話を聞けるようになったのには、驚いた。「もっと話したい」という思いが、「我慢して聞く」態度につながっている。

カ 考えることは正に哲学であり、その楽しさを味わわせる機会は少なかったかも知れない。

(2) 第2期（確立期：ハワイとの交流を通して） 2014 年6月 ～ 2014 年9月

① 概要

この確立期には、公益財団法人上廣倫理財団の教員交流事業によって、ハワイの研究・実践者と、「p4c せんだい」の実践者との相互訪問が実現し、内容の濃い交流が行われた。10 年にも及ぶ「p4c ハワイ」のノウハウを学ぶ中で、「p4c せんだい」のスタイルが固まってきた時期である。

ア p4c ハワイのメンバーによる仙台訪問

6 月 19 日からの 6 日間、ハワイから、大学、高校、中高一貫校、小学校に勤務する 6 名の研究者・実践者が仙台を訪れ、5 つの小学校と 1 つの私立高校、そして、本学の学生を対象とした実践を行った。仙台を離れる間際には、市内のテニススクールの社員を対象とした実践も行った。この間の土曜日には、全国の実践者も交えた実践発表会や情報交換会なども行われ、p4c に対する理解を深めるとともに、交流が広がる中で今後への展望を明らかにすることができた。特に「p4c せんだい」の多くのメンバーが迷っていた「教師の介入のあり方」について、ハワイの先生方から多くを学ぶことができたのは大きな収穫であった。また、子どもに写真を見せて、そこから問いを出させる手立てや書かせることの大切さについても、学ぶことができた。国語の授業の中で p4c を取り入れた実践も提供したが、ハワイにおける評価基準についても示していただくことができた。場を提供していただいた私立の J 高校では、問いに対する一人ひとりの意見の新鮮さに、「ええっ！彼はそこまで深く考えていたんだあ」などと、参加していた生徒も参観していた先生方も驚きを隠せない様子であった。本学では、ハワイの先生方に参加していただき、「人間と思想」、「哲学演習」、「教育の原理」の授業の中で p4c の取組が行われた。特に実際にコミュニティボールを使つてのセッションでは、次第に考えが深まっていく手応えを感じ、参加者全員が p4c の効果を実感できたようであった。

ハワイの訪問団が帰国した翌 7 月には、今回の交流で得た収穫を、事後の研修会を通して「p4c せんだい」のメンバーが共有した。

イ 日本教員によるハワイ訪問

8 月。これも上廣倫理財団の教員交流事業の一環として、今度は「p4c せんだい」のメンバーである推進校の教員 3 名が、本学の見上学長、教育復興支援センターの野澤副センター長と小田特任准教授とともに、ハワイを訪れる機会に恵まれた。3 名のメンバーはそれぞれに「p4c の本質を探る」、「問い返しのあるやり方と発言できない子への支援の仕方」、「教科における活用のあり方」という明確な課題を抱えての海外研修であつ

た。ハワイでは、ワイキキ小学校やカイロア高校、ワイマナロ小中一貫校でのセッションに参加するとともに、ハワイ大学での研修会にも参加した。ハワイでは p4c を日常的に取り入れており、教科指導のあり方などについて見聞を広めることができた。かなりタイトなスケジュールで島内観光の余裕さえなかったが、それぞれの課題について明るい見通しが持てるなど、大きな収穫を得ての帰国となった。翌9月には、見上学長も参加し、ハワイ訪問研修での成果を、「p4c せんだい」のメンバー全員で共有することができた。

② 特徴的な実践事例

ア ハワイの研究者が主導して、男の子と女の子が映っている大きな写真を見せ、そこから「不思議に思うこと」を引き出すセッションが、仙台市内3つの小学校の5つの授業で行われた。それぞれにハワイの先生がファシリテーターとなり、豊田特任准教授をはじめ訪問団に随行した先生方の通訳によって授業は進められた。ある学級では、「女の子は楽しいのか」という問いが、また別の学級では、「人間にはなぜ性別があるのか」といった問いが出され、それぞれに活発な話し合いが行われた。その中で印象的だったのは、ハワイの先生方による「問い返し」であった。「女の子は笑っていないので楽しくはない。」という流れに対し「笑っていないければ楽しくないのか？」という問い返し。性別について話し合う中では、「もし男か女だけだったら困るのか？」という問い返しが行われた。その度に子どもたちの考えが深まっていくのを感じた。教師が介入していいのかという私たちの疑問も解消できた。また、セイフティの大切さを説明する場面では、「安心して話せないのはどんなとき？」と、逆に考えさせる手立てが効果的であった。

イ 実践を快諾していただいた私立のJ高校では、特別進学コースの1年生と2年生の学級で約20名の生徒を対象にセッションが行われた。1年生のクラスでは、自分の学校について「先生の教え方が熱心」という意見や「将来は親孝行をしたい」という意見が多く出され、参観していた教職員から「ええーっ」という驚きの声が漏れた。2年生のクラスでは自己紹介の際に、半数の生徒が英語でのスピーチを行い、「自分にとってのチャレンジとは」についての話し合いにも積極的に取り組んだ。終了後、教室に戻る生徒たちからは、「へえーっ、彼がそこまで深く考えているとは思わなかった」という声が聞こえてきた。同じ言葉は参観していた教職員からも聞かれ、「普段一緒に生活していて、互いに理解していたつもりだったけれども、こういう機会がなければ分らなかった」という話が印象的であった。

ウ 本学での実践では、「教育の原理」の授業におけるセッションが圧巻であった。前半、約100名の学生が15名から20名ずつ6つのグループに分かれ、ハワイの先生方が各グループのファシリテーターを務めた。後半の全体会では、各グループから出された「みんなで話し合ってみよう」という問いの中から投票で「ハワイにもモンスターペアレンツはいるのか？」という1つの問いに絞られ、活発な話し合いが展開された。「モンスターの具体としてどんな例があるのか」とか「どこからがモンスターになるのか」といった問い返しもあり、学生たちは自らの考えを深めながら、あっという間の充実した時間を過ごすことができた。この実践では「少人数だと話せるけれど、大人数になると話しづらい」という課題も明らかになった。

エ 8月に渡航したハワイへの訪問団にとって最も印象的だったのは、セッションの最中に周りでビデオを撮っているメンバーにもコミュニティボールが渡されたことであった。「私はあなたの意見を聞きたい」という子どもたちの意思表示であり、傍観者的な態度は認められないということでもあった。途中で授業を参観にきた校長先生にもボールが渡されるそうである。先生もコミュニティを構成する一員であり、そこに上下関係や部外者という意識はない。これがセイフティということであった。これは p4c を日本の教育現場に取り入れる際に求められる、教員の意識改革の一つになるであろう。

③ 実践者や参観者からの感想・疑問および主な助言

ア 「問い返し」が考えを深めるということが、よく分かった。問い返しのセンスをどう磨いていくかが今後の課題だと感じた。

- イ テーマの設定によって考えの深まりが違ってくる。どんな「問い」がよいのか、今後探っていききたい。
- ウ 教師もコミュニティの一員として意見を述べたり質問したりできるが、普通の授業における指導者ではないことを、教師も子どもも認識することが大切。
- エ 最も重要なのはセイフティの構築。相手を傷つけてはいないかなど、常にレベルの維持に配慮する必要がある。教師はコミュニティの一員として介入してよい。
- オ 聞く耳を持ち、異なった考え方を受け入れるということは、固執からの脱却であり、思考力の向上には不可欠な要素であると、改めて認識した。
- カ 「自分の発言はどうだったのか」という自問は、生きていくことの価値であり、子どもにとっては学びの深まりに通じる。
- キ ハワイの高校での実践では、意見を出し合う中で問いが生まれ、それに対する意見を言うと、別の人が新たな問いを出すという展開があり、興味深かった。これぞ p4c の求める形ではないかと思った。

(3) 第3期（拡大期：発信を通して） 2014 年 10 月 ～ 2015 年3月

① 概要

この拡大期には2つの特徴がある。一つは、国語や社会、道徳や総合的な学習の時間など、通常の授業場面の p4c の活用が進んだこと。もう一つは、一般教員への周知・啓発の方法として、教員による p4c 体験を取り入れ、普及させたことである。

教科指導への導入については、H 小学校の国語科と道徳において、綿密な指導計画のもとに p4c を効果的に用いた授業が行われた。N 小学校では総合的な学習の時間に p4c を取り入れ、防災意識の高揚を図った。Y 中学校では、ハワイの研修に参加した教員が、自ら担当する社会科の授業に p4c を取り入れ、その有効性を探った。K 小学校では仙台市の特別活動研究部会主催の提案授業において、p4c を活用した学級会活動の授業を提案し、その後の研究討議では参加した多くの教員から貴重な意見を得ることができた。また、仙台市教育センターによる「授業づくり訪問」の際には、Y 中学校と M 小学校が、それぞれ p4c を活用した道徳と生活科の授業を提案し、指導主事からの指導・助言を得ることができた。このように、教科・領域における p4c 活用の授業実践が一気に拡大していく時期となった。

この第3期には、推進校以外の教職員に対する周知・啓発も大きく前進した。仙台市小学校長会や中学校長会を通じた広報によって、10月と11月に行われた p4c 公開授業には、「p4c を初めて見る」という多くの先生方が参加した。また、白石市の武田教育長からの声がけによって、白石市の小中学校から数名の参加者もあった。これまでの授業参観では、子どもたちによる p4c セッションを参観するだけだったが、この時期からは、「参加者による p4c 体験」の時間を設定することとした。その結果、「ボールを作りながら話すと、周囲の視線を気にすることなく、緊張せずに話せる」などといった、参観しているだけでは分からない効果も実感でき、参加者の p4c に対する理解を一気に深めることができた。こうした方法は、2015 年 1 月に白石市立第二小学校で行われた白石市内の教員対象の研修会でも取り入れたところ、参加者から大好評であった。

こうして p4c の深まりと広がりが生まれた背景には、毎月開催された夜の研修会がいつそう充実してきたことに加え、p4c についての様々な情報発信があったことを忘れてはならない。校長会で本学との窓口となっている校長への説明と市立の全小中学校への案内、日本教育新聞における H 小学校での道徳実践を中心とした記事の掲載、全国教育系大学研究協議会での研究発表、仙台市小学校教育研究会特別活動研究部会での授業提案、仙台市教育課題研究発表会での5本の研究発表など、様々な場での様々な形による情報発信によって、一般教員の p4c に対する関心が高まり、この1年間に p4c の普及・啓発が大きく進んだことは、特筆に値する。これは、p4c が持つ魅力と、実践者による熱意とが織りなした結果であることは言うに及ばない。3月には、上廣倫理財団の教員交流事業として、今年度2回目のハワイ研修に「p4c せんだい」から4名が参加する予定

である。実践推進校においては、p4c 活用の成果と課題を次年度に生かそうとの計画が進められている。また、教育長自らが導入を検討していただいた白石市では、p4c を次年度4月から校内研究の柱にしたいという学校も出てくるなど、来年度のp4cの充実・発展への期待がいつそう高まる拡大期となった。

② 特徴的な実践事例

ア H 小学校6年生の国語の授業では、「海のいのち」の2時間目にp4cによる対話を取り入れ、初発の感想を交流させた。まず、「太一は父の死んだ海で、どんな気持ちで漁をしているのか」という、ある児童が出した問いについて話し合わせた。「父に負けたくないような漁師になりたいから」や「太一は海やクエを憎んではいないと思う」といった意見に、教師は「なぜ?」と問い掛ける。そこからさらに考えが深まり、ボールを手にした児童からは次々と意見が出てくる。ある程度出尽くしたところで、教師が「みんなが出した思いに至る、漁師とは、一体何だろう」と、問い掛けた。これはある児童から事前に出されていた問いであった。話し合いでは「魚を獲る人」から始まり「気持ちの強い人」「死ぬ覚悟を持って漁に出る人」などと、児童の考えが深まっていった。こうして初発の感想を交流させることによって読みを深め、読みへの興味関心を高めた上で、3時間目からの「場面ごとの読み取り」に入っていくという、見事な実践であった。

イ K 小学校5年の学級会活動では、これまでの生活を振り返りながら学級目標の意味について考えさせるという授業の中でp4cを活用した。具体的には、学級目標と照らし合わせながら学級行事での遊びを話し合うという活動であった。仙台市内の研究会ということで、約40名の参観者があったが、子どもたちはボールを手にしながら伸び伸びと意見を発表した。終了後、子どもたちからは、「ボールがあると緊張しないで話せる」「丸くなって座ると、みんなどんな表情なのかが分かって、安心できる」などの感想が寄せられた。事後の検討会では、参加した教員から、「反対意見も遠慮なく言える雰囲気が良い」「ボールがあると、話し手のはっきり分かり、注目もするので、子どもたちが集中できていた」などの意見が出され、さらに「p4cの存在を初めて知った。自分も試してみたい」といった声も聞かれた。

ウ 白石市内の教員も参加対象とした白石第二小学校での校内研修会には、教育長を含め55名の教職員が参加し、p4cを実際に体験しながら理解を深めた。まずは、大きな楕円の形に置かれた椅子に座っての開会。普段の講義形式とは違い、先生方は視線をどこに置いたらよいのかと落ち着かない様子。それが、自己紹介が終わる頃には、自分が話した安堵感と、周囲の人についてある程度分かったという安心感からか、表情が柔らかくなっていく。途中での説明によって、自己紹介の際の「毛糸を巻きながら」という狙いも理解できたようである。「みんなで話し合ってみよう」という問いについては、16もの問いが出され、多数決の結果「人はなぜ美しいと感じるのか」に決まった。対話の場面では、ボールは下から投げるなど丁寧に扱うこと、発言の順番などセーフティを確保することなどの説明にうなずいたりメモをとったりの先生方。事後のアンケートには、「体験してみてよく分かった」「p4cでの教師の姿勢は特別支援教育の考え方に似ている」「今までにない授業の進め方に戸惑いもあるが、ぜひ実践してみたい」などの感想が記されていた。

③ 実践者や参観者からの感想・疑問および主な助言

ア 適切な人数や時数の確保、教科指導への活用方法については、今後も研究を進めていく必要がある。

イ 話し合いが活発ではないように見えても、感想を書かせると、子どもたちがいかに深く考えていたのかがよく分かった。

ウ 子どもの意見から問いを立てることが、考える意欲につながると感じた。

エ 意見の羅列を切り崩すための問い返しは必要だが、その際には「教える」「導く」といった教師の立場を取らないことが大切。

オ 対話を深めるためには、抽象的ではなく、子どもたちの体験を織り交ぜた意見交換をさせたほうが良い。

カ 教師は最後にまとめてしまいがちだが、途中で時間となり、結論がでないままということで良い。子ども

たちがその後も考え続けるということが重要。

キ 考えること、それを聞き合いまた考えることの楽しさを感じ、この楽しさを子どもにも味わわせたいと思った。自分は日々の授業や学級活動の中でこうした体験を作っていたらどうかと反省した。

ク ボールを手にするると話しやすくなるのが不思議。今後、生徒指導担当者会や保護者会など、大人の会合でも使ってみたい。

3 成果と課題

(1) 実践の中から

p4c はコミュニティボールづくりから始まる。自己紹介をしながら毛糸を巻き、全員で1つのボールを作る。そうしたプロセスを経ることによって、全員の気持ちが込められた大切な宝物ができあがるのである。また、このボールのもつ柔らかな感触も、子どもたちには人気がある。「これを持つと、何となく話したくなる」という、理屈では説明できない感覚。これまで述べてきた「実践事例」や「感想」の中にも、理屈ではなく感覚的なものが多く含まれていることに気づかされる。これらは、p4c の持つ魅力、あるいは可能性ととらえることはできるが、「p4c の効果」として掲げるまでには、さらに検証が必要である。

そこで、これまでの実践の中から「子どもの変容が確認できたこと」と「教師の新たな気づき」ということに焦点を当て、それを根拠としながら、これまでの実践の成果についてまとめていきたい。

① スタート段階における基本的セッションの中で

コミュニティボールを作り、「問い」を出し合うという最初の活動を、ここでは「スタート段階における基本的セッション」と名付ける。この実践における成果は、次の通りである。

なお、このセッションの進め方については、実践の成果として資料のとおりまとめることができた。

ア 毛糸を巻く作業によって、周囲の視線を気にせずに、どの子も話すことができた。

イ ボールを持った人だけが話せるというルールがあることによって、仲間の話を静かに聞くことができた。

ウ みんなが聞いてくれるという環境が整うと、話したいという気持ちが湧き起こり、普段話さない子もしっかりと話すようになった。

エ 「正解がない問い」ということで、子どもたちは間違いを怖れず、安心して考えることができた。

オ 教師も立場を離れ、コミュニティの一員として参加することによって、じっと発言を待つなど、普段とは異なる関わりをすることができた。

カ 子どもの発言の内容や発言者の指名などから、集団における普段の人間関係をつかむことができた。

キ 対話の場面では、普段は見えない子どもの考えや、思いの深さについて知ることができた。

ク 発達障害をもった子供も、興味をもって参加する姿が見られた。

ケ 友達の考えを聞いて、新たな疑問を投げ掛けるなど、子どもが真剣に考えている様子が確認できた。

コ 事後の感想文から、聞いているだけの子どもであっても、考えが深まったことが分かった。

② 教科等の指導の中で

ア 小学校国語での実践では、事前にかかせた子どもの問いを基にして初発の感想を交流させた。その結果、読みが深まり、次時からの読み取りへの意欲を高めることができた。

イ 小学校における総合的な学習の時間での実践では、テーマに迫るために子どもたちの学習意欲や課題意識を高めることが不可欠である。実践では、p4c による意見交換によって子どもたちの意識の高まりが確認できた。特に、抽象論や「べき論」ではなく、自分の体験を話す場面をつくると、子どもの集中力が高まり、考えも深まることが分かった。

ウ 単元最後の発展学習に p4c を用いた中学校社会科の実践では、これまでの学習がどれだけ定着しているの

か、既習事項以外にどれだけの知識があり、どんな関心があるのか、などについて、把握することができた。また、普段の授業ではなかなか手の回らない、知識・理解を今後に生かしていこうとする態度を養う貴重な場にする事ができた。

エ 小学校の道徳の実践では、教材文を読んだ後、「勇気をもって行動したのはだれ？」について対話を行い、そのうえで「勇気とは？」について p4c を用いながら意見を出させた。その中で子どもたちは、まだ発言していない子にボールを渡したり、参観している教員にもボールを渡したりして、みんなの意見を真剣に聞こうとしており、考えが深まっていく様子が確認できた。

オ 小学校の学級会活動の実践では、「学級行事でのゲームを決めよう」というテーマを掲げ、授業の前半で p4c による対話を行いながら学級目標の意識づけを図り、後半でゲームを決める話し合いを行った。対話の際には、誰かの意見に引きずられることなく、また、反対意見であっても決して臆することなく、子どもたちは自由な雰囲気の中で、自分の思いを発言することができた。そうした活発な話し合いを受けた結果、ねらいに沿った学級会をつくりあげることができた。併せてこの実践では、子どもたちの慣れによって、p4c を授業の一場面に取り入れるモデルを示すこともできた。

(2) 実践者へのインタビューから

推進校の数名の実践者に対して豊田特任准教授が行った聞き取り調査からも、p4c の取組の成果をうかがい知ることができる。その一端を次に掲げる。

- ① これまでなかなか言えなかった特別支援の子たちが、「こんなふうに言ってもいいんだ」と、生活経験を表現できるようになってきた。こういう子どもたちにも対応できる深さをもっていると感じた。
- ② 被災地からの転入児童もあり、被災のレベルが異なる子どもたちに教師はどう向き合ってよいのか、難しさを感じていた。それが p4c の対話の中で、被災した子どもが心の中に閉じ込めていた体験を自然に話す場面に出会い、驚かされた。
- ③ 「なぜ？」「本当かな？」という言葉が教室に掲示しているので、日々の思考にも役立っている。コミュニティボールは、「持っていると話せる」という、子どもにとってお守りのようなものになっている。
- ④ 最近の子どもたちは「どう書けばいいの？」などと、考えることをせずに、すぐに答えを求めようとすると感じていた。それが p4c を通して、一旦立ち止まって考えることの大切さを共有できるようになった。
- ⑤ p4c で選ばれる問いは、決して優等生の考えた問いではないことが多い。学力に自信のない子どもでも自分の問いが選ばれることで自信に繋がっている。
- ⑥ これまで教師は、発問を考え答えを求めることばかりに目が行っていたが、子どもが自分で立てた問いについて真剣に考えることがどれほど大切かということを確認するようになった。
- ⑦ 本校には、発達障害を抱えて学級には受け入れられない子やなかなか話せない子がいる。失敗した子へのからかいもあり、セーフティが大切だと感じていた。そうした中、いつも泣いていた5年生の子が p4c の中で話せるようになった。すると、周りの見方が変わってきて、その子は自信をもって生活するようになった。
- ⑧ p4c には、聞く・話すといった学級経営の基本が入っているが、教師も一人の参加者という立ち位置が、これまではない良さだと思っている。

(3) 今後の課題

- ① これまでは小学校での実践が多かったが、今後は、実践の場を中学校や高等学校、大学にまで拡大するとともに、社会教育関係にも実践の場を求めていく。そうした中で、校種などの違いによる成果と課題を明らかにすることが期待できる。
- ② これまでの成果をもとに、分かり易い啓発リーレットや資料の作成、および情報発信の工夫・開発に力を注ぎ、p4c のよりいっそうの普及・啓発に努める必要がある。

- ③ 校種の拡大とともに、教科指導における p4c の活用がどこまでできるのか、その際の条件は何なのかについて、実践を通して探っていく必要がある。
- ④ 入門コースや経験者コースなど、参加者のニーズに合った研修の持ち方について検討し、内容をいっそう充実させていく。併せて、熟練者を対象とした指導者養成にも努め、OJT を促進させていくことが大切である。
- ⑤ これまで、多くの実践を積み上げる中でその効果や有効性を探ってきたが、それぞれの実践で共通し一定の成果が認められる内容については、その妥当性の検証や一般化への道筋についても研究していく必要がある。
- ⑥ 推進校のメンバーを中心とした研究組織を確立し、p4c の実践研究が計画的かつ継続的に進められるような体制づくりが求められる。

4 資料

「基本的セッション」の進め方

(1) 趣旨の説明とコミュニティボール作りの説明

「なぜ？」と考える大切さや、毛糸の巻き方について。

(2) コミュニティボールを作りながらの自己紹介

「名前」と「自分の好きなもの」など。

(3) コミュニティボールの完成とルールの説明

持っている人だけ話せる、パスが可、発言してない人、優先、否定や批判をしない、など。

(4) 問いを考える

正解が分からないもの、調べてもわからないこと、みんなで考えてみたいこと、など。

(5) 問いの発表

コミュニティボールを回し先生が黒板に書く、書いたカードを黒板に貼るなどの方法も。

(6) 問いの選定

多数決も可。顔を伏せさせるなどの配慮を。補助者の活用もあり。

(7) 問いについての話し合い

問いを出した理由を話させたあと、問いへの回答や、問いに関連しての対話をする。

(8) 考えを深めさせるための問い返し

教師も一人の参加者としてさらなる問いを投げかける。「本当？」などのツールを活用する。

(9) 振り返り

- ① 考えを話せたか？ ② 話を聞いたか？ ③ 考えが深まったか？
- ④ 安心して参加できたか？ ⑤ またやってみたいと思うか？



5 共同研究者

東京工業大学	グローバルリーダー教育院	特任准教授	豊田 光世
宮城教育大学	学校教育講座	教授	田端 健人
	社会科教育講座	准教授	川崎 惣一
宮城教育大学	教育復興支援センター	副センター長	野澤 令照

謝辞 本研究の推進にあたり、多大なるご寄附とご支援を賜りました、公益財団法人上廣倫理財団、及び熱い思いをもって p4c の実践に取り組まれました関係の皆様、心から感謝を申し上げます。有難うございました。